

入選

『本物の壁』

とおりすがり

数年前に両親を亡くし親戚との付き合いも少ない僕にとって、唯一交流のあった歳の離れた従兄の家に泊まるのが年末の恒例行事となっていた。

小さいながらよく手入れのされた庭には小ぶりの柿の木が植わっているが、この時期には葉も実も落ちており、古びた印象を受ける家屋と共に冷たい空気にさらされていた。

しがたないサラリーマンである僕とは違い、この従兄は若くして社会的に成功し大層な資産を築いていたが、都心の高級マンションを購入するわけでもなく、田舎町の古びた家に住んでいた。

「兄さんは立派なのに、どうして僕のことを気遣ってくれるんかね。」

辛うじて差し込む冬の陽光の中、軒下に腰掛けながら唐突に長年の疑問を口にしてみた。僕の親戚は代々弁護士や医者を出す家柄であったが、僕の父は高校を中退して建物の壁にセメントを塗る作業者となったため、一族から白い目で見られていた。

そんなこともあって僕が幼少の頃より素行が悪く、両親や人様に迷惑をかけたが、なぜかこの立派な従兄は僕の事を気にかけ、色々と世話を焼いてくれていたのだ。

「立派なのは外見<そとみ>だけさ。」

従兄は白く塗装された外壁を掌でなでながら呟いた。掻き落とされたような凹凸の模様をもつ壁は従兄の性格を表すように穏やかさと堅実さを漂わせていた。

「切れ目もなく重厚な壁に見えるだろう？でも実際は厚さ20mm程度のモルタルでしかない。つまり偽物ってことさ。」

「とてもそうは見えないね。」

僕も立ち上がり壁面に触れてみた。堅くひんやりとした感触は削りだされた石を連想させた。

「君のお父さんは本当に優秀な職人だったんだよ。そして優しく、強い人だった。私はそんなお父さんが大好きだったんだ。」

そして従兄はゆっくりと父との思い出を語り始めるのだった。

※

私の両親が亡くなったのは小学校に通い始めて間もない頃だった。

札幌のゴロツキで一族の鼻つまみ者だった父母であったが、盗んだ車で飲酒運転をしてトラックに正面衝突するというどうしようもない最期であった。

名門一族というものは宗教的信心とは切り離せないものなのか、それとも世間体を気にしたのかはわからないが、嫌われていた両親の葬式であったがそれなりに盛大に行われた。そして葬式後の宴席で、”私の行く末”についての話し合いがおこなわれたのだった。

穏やかな口調で始まった会議ではあったが、なかなか引き取り手は見つからず、酒が入っていたこともあり、時間が経過するにつれて場の空気は妙な方向にエスカレートしていった。

次第と話の内容は両親と私に対する罵詈雑言が占めるようになり、私に向けられていた視線は哀れみから憎悪へと変わり、『出来損ない』、『粗大ごみ』といった言葉が嘲笑と怒号とともに発せられた。

私は幼少ながらに生まれてきたことを後悔し、今すぐ消えてなくなってしまいたかったのを覚えている。

そんな険悪な会合がしばらく続いていた時、一人の青年が整然と立ち上がった。

「僕が高校を辞めてこの子を育てる。」

小さいながらもよく通る声だった。

※

「そりゃ、みんな君のお父さんを引き留めようとしたさね。でもね、そんな話し合いも予定調和というやつで、結局は彼が私を引き取ることになった。なにせ『出来損ない』で『粗大ごみ』の引き取り先が決まったんだからね。みんな万々歳さ。」

彼のご両親を除いてね、と従兄は苦笑いした。

「そのあとは死に物狂いというやつでね。彼は両親から半ば勘当され、この田舎町に移り住み、学校を辞めて仕事を探した。彼には当時付き合っていた幼馴染がいて、彼女も学校を辞め、私の面倒を見てくれた。ひどく貧しかったけれど、彼らは私を大事に育ててくれた。文句の一つも言わずにね。私はとにかく勉強した。彼らの失ったものを考えた時、子供であった私には立派になって恩を返すくらいしか考えられなかった。出来損ないの子供だったが、そんなことは言ってもらえなくなったのさ。」

僕はもう何も言えなくなっていた。

「私が仕事に就いて数年後に、彼らは東京に引っ越していった。この地域では冬に左官の仕事が無くて東京に出稼ぎに行っていたけれど、生まれたばかりの君から長期間離れることを嫌ったんだろう。」

『ともあれ・・・』従兄は再度、モルタル外壁をさすった。

「我々は親子として出来損ないの偽物だったけど、本物であろうと努力した。この壁のよ
うにね。」

陽はやや落ち始め、冬の風が少し強くなったように感じた。従兄は冬の冷気が染み込んだ石壁をじっと見つめていた。

「じゃあ、僕に優しいのは両親に対する恩返しなの？僕は兄さんから両親を奪ってしまったのに。」

僕の突然の問いに彼はきょとんとした顔になった。そして少し考えた後、穏やかな口調で切り出した。

「それもあるかもしれないが、それだけじゃないね。」

彼は微笑みながら僕の瞳を見つめた。

「私は君の事がとっても好きなんだ。なにせ大好きな人と大好きな人の間に生まれた人だからね。」

冷たい風が柿の木を揺らしていたが、まだ冬の日差しは僕たちを優しく照らしていた。